2022 年 10 月　立命館大学大学院キャリアパス推進室

2022 年度「研究会活動支援制度」採択研究会のメンバー・勉強会参加について

大学院キャリアパス推進室では、院生同士の研究交流を促進するために「研究会活動支援制度」を設け、2022 年度は以下 16 の研究会を支援しています。興味のある研究会があれば、メンバーや勉強会に参加することが可能です。

※学外の方はメールアドレス<g-schol2@st.ritsumei.ac.jp>まで問い合わせください。折り返し大学事務局より確認メールを送るので、そちらに希望内容を書いて返信してください。

（五十音順一覧）

No.1　移動空間時間研究会（いくじ研）
No.2　近・現代社会研究会
No.3　研究方法論勉強会
No.4　現象学研究会
No.5　古文用音声認識システム研究会
No.6　社会運動論研究会
No.7　心理学生研究会
No.8　男性性研究・男性学研究会
No.9　独・仏現代哲学研究会
No.10　日本思想史研究会
No.11　Public & Inclusion Research Project
No.12　マインドフルネス研究会
No.13　明律研究会
No.14　立命館司法犯罪心理の会
No.15　立命館朝鮮近現代史研究会
No.16　文構造研究会　<秋募集での採択研究会>

※研究会名をクリックすると、各研究会の概要の一覧のページに移動します。
※掲載されている研究会は、春学期募集で採択された研究会のみです。
　秋学期募集で採択された研究会があれば、後日更新します。
※研究会メンバーと所属情報は 2022 年 10 月 17 日時点のものになります。【No.16 追加に伴う】

No.1

研究会名	移動空間時間研究会（いくじ研）
研究会の目的、問題意識や解明すべき課題、目標とする研究成果	私たちは、認知言語学の視点から、移動・空間・時間に関するメタファーやメトニミーなどの言語現象を説明することを目的としています。 研究会の活動は、毎週の読書会を通して、認知言語学の理論を用いて、メンバーが興味を持つ表現について議論を行っています。例えば、以前の活動では、ラネカーという学者が提唱した「主体化」という理論で、「教室に入る」「会社に入る」「梅雨に入る」を分析しました。
メンバー構成	言語教育情報研究科　前期課程：2 名 文学研究科　後期課程：2 名、前期課程：1 名

（五十音順一覧に戻る）

No.2

研究会名	近・現代社会研究会
研究会の目的、問題意識や解明すべき課題、目標とする研究成果	研究会の目的は、日本あるいはアジアの近・現代の動向について研究するメンバーが発表を行い、その原稿をもとに研究雑誌を刊行することである。研究発表は各月で行い、2 月中の雑誌の発刊を目指している。
メンバー構成	先端総合学術研究科：5 名 文学研究科　後期課程：3 名

（五十音順一覧に戻る）

No.3

研究会名	研究方法論勉強会
研究会の目的、問題意識や解明すべき課題、目標とする研究成果	本研究会は、質的・量的調査の手法について他研究科に所属するメンバーと意見交換を行い、学びを深め、研究の質を高めることを目的とする。各メンバーは、自らの研究テーマを踏まえ、調査・分析に必要な手法を紹介したり、参考資料や課題等を共有したりして問題提議を行う。他のメンバーから分析方法やその解釈について意見・見解を得ることで、各々の修士論文や博士論文の執筆に貢献していく。
メンバー構成	経営学研究科　後期課程：3 名 政策科学研究科　前期課程：1 名

（五十音順一覧に戻る）

No.4

研究会名	現象学研究会
研究会の目的、問題意識や解明すべき課題、目標とする研究成果	今年度の現象学研究会では、「現代的な実在論に対して現象学がもつ潜在能力を測る」ことを目標とする。 昨年度から、思弁的実在論と現象学との関係に関する研究を行ってきたが、現象学がグレアム・ハーマンに与えた影響については十分に明らかにすることができなかった。これを踏まえて、今年度はハーマンの著作の読解を通じて、現象学が思弁的実在論の問題提起にどのように応答すべきかを考察する。 また本研究会のメンバーは、間接的・直接的に現象学研究に関わりつつも、それだけには止まらない幅広い研究分野で活動している。そこで本研究会では、各人の個人研究発表も交えることで、研究会全体での研究課題とメンバー各人の研究課題との相互作用を生み出すことも試みる。この試みを通じて、本研究会の活動をメンバー各人の研究へと還元することが可能になるだろう。
メンバー構成	文学研究科　後期課程：2 名、前期課程：1 名 先端総合学術研究科：2 名 法学部：1 名 他大学：2 名

※本研究会は勉強会への参加希望受付のみです。

（五十音順一覧に戻る）

No.5

研究会名	古文用音声認識システム研究会
研究会の目的、問題意識や解明すべき課題、目標とする研究成果	本研究会は、日本の古文用音声認識システムの構築と活用について情報を共有しながら研究・開発を行うために設置する。 日本には数百万の古典籍・古文書があり、近年多くの機関がインターネットを通じてこれを公開し始めているが、くずし字と呼ばれる文字で記されているため現代の多くの人は文字を識別できず、読むことができない状況にある。専門家の手により翻刻が進められてきたが、それらは全体のごく一部に過ぎない。また今日ではデジタルデータの重要性が増しており、テキストデータとしての翻刻が求められる。 このような状況下で、AI や OCR 技術を活用したくずし字解読に大きな進展がみられる。しかしこれらは絶対的な技術ではなく、またくずし字解読を得意とする人々の多くはこのような技術を使用するよりも、使い慣れたアナログ的な方法の方がより効率的に翻刻できるというのが現状である。従って、デジタル技術を活用したくずし字解読技術の発展を目指すと同時に、人力での翻刻作業、特に翻刻のテキストデータ化を如何に効率化させるかが現在の重要課題となる。 そこで当研究会は、翻刻のテキストデータ化を困難とする解読者が、翻刻成果を読み上げることで、音声認識システムにより簡単にテキストデータ化できるシステムの構築を目指している。 まず今年度は江戸期の古典籍・古文書における音声入力を想定する。音声認識の主要な構成要素として、その音が何かを判別する音響モデルと、ある単語列が出現する確率を出力する言語モデルがある。古文用音声認識システム構築にあたり特に課題となるのは言語モデルである。これについて大きく以下 2 点の取り組みを考えている。 1. 形態論情報付き古文テキストの作成 良い言語モデルを作成するためには、実際に使用される状況を想定し、その状況で入力されるテキストデータと同様の傾向のテキストデータを学習データとして集めるこ

	とが重要である。今年度は江戸期の古典籍・古文書を対象とした音声認識システム構築を目指しているため、文学研究科院生が中心となり、対象にあったテキストデータを作成する。具体的には、歌舞伎役者を批評した芸評書である役者評判記を対象に、形態論情報付きテキストデータを作成することを検討している。 2. 古文用言語モデルの構築 　まず音声認識システムの主要構成要素である言語モデルについて、古文用のモデルを構築する必要がある。そこで情報理工学研究科院生が中心となり、作成されたテキストデータや、国立国語研究所言語資源開発センターが公開する日本語歴史コーパス江戸時代編のデータを用いて、古文用統計的言語モデル(単語 N-gram)を構築する。上記のような大量の古文テキストデータを用いることで、認識性能がより良いクラス N-gram やマルチモデル(文法と N-gram の併用)を試みる。
メンバー構成	文学研究科　後期課程:2 名、前期課程:1 名 情報理工学研究科　後期課程:1 名

(五十音順一覧に戻る)

No.6

研究会名	社会運動論研究会
研究会の目的、問題意識や解明すべき課題、目標とする研究成果	本研究会は社会運動論の理論を学習することを通じて、各メンバーが研究対象とする社会運動の事例を検討する。今年度は、社会運動論における文化的研究の概念と方法に沿って、運動のカルチュラル・ポリティックスに着目する。
メンバー構成	社会学研究科　後期課程:1 名、前期課程:1 名 先端総合学術研究科:3 名

(五十音順一覧に戻る)

No.7

研究会名	心理学生研究会
研究会の目的、問題意識や解明すべき課題、目標とする研究成果	本研究会は，複数のキャンパスや研究科にわたって所属している心理学とその周辺領域を専攻する学生の交流の場をつくることを目的としています。そうした交流によって知識・技術の交換を行い，研究基盤をつくるだけでなく，共同研究の発端としたいと考えています。本研究会で得た知見を各研究室において頒布・応用することで，立命館の心理学研究全体のレベルアップにもつながれば幸甚です。
メンバー構成	人間科学研究科　後期課程:5 名、前期課程:1 名 食マネジメント研究科　前期課程:3 名

(五十音順一覧に戻る)

No.8

研究会名	男性性研究・男性学研究会
研究会の目的、問題意識や解明すべき課題、目標とする研究成果	みなさんは“男性性”という言葉を聞いたことがありますか？ “Toxic Masculinity”（有害な男らしさ）“Engaging Man”（参画する男性）や”Caring Masculinity”（ケアする男性性）など男性性のあり方に対する新しい研究は広がりをみせています。当研究会では社会学をはじめとした様々な学問分野から、日本における男性性研究・男性学の課題点を明らかにし、これからの男性性研究・男性学のありかたについて考えていくために研究を実施しています。主な活動としては、国内外の男性性研究・男性学に関する書籍・論文の検討を実施しています。ジェンダー研究を男性性という切り口から考えている研究会です。当研究会では様々なバックグラウンドをもつ方と共に研究を実施したいと思っておりますので、ご興味があれば、ぜひ参加してみてください！
メンバー構成	社会学研究科　前期課程：2 名 先端総合学術研究科：1 名

（五十音順一覧に戻る）

No.9

研究会名	独・仏現代哲学研究会
研究会の目的、問題意識や解明すべき課題、目標とする研究成果	本研究会の目的 本研究会の目的は、フランス現代哲学におけるドイツ哲学の受容について研究を行うことにある。現在、フランス現代哲学を研究するにあたってドイツ哲学、とりわけヘーゲル哲学の影響を無視することは決してできない。具体的には、アレクサンドル・コジェーヴ（Alexandre Kojève, 1902-1968）による『ヘーゲル読解入門』を中心として、アレクサンドル・コイレ（Alexandre Koyré, 1892-1964）、ジャン・イポリット（Jean Hyppolite, 1907-1968）らによるヘーゲル哲学のフランスへの導入がその後のフランス現代哲学においていかなる影響を与えたのかを明らかにしてゆく。本年度は、コジェーヴによるヘーゲル読解とその受容に着目し、彼の思想が後世のフランス現代哲学にどのような影響を与えたのかについて検討を行ってゆく。 問題意識・解明すべき課題 本年度、中心的に扱うコジェーヴは、1933 年から 1939 年にかけてパリの高等研究実習院でヘーゲル『精神現象学』についての講義を行っており、この講義にはジャック・ラカン、ジョルジュ・バタイユ、ロジェ・カイヨワ、メルロ＝ポンティ、ピエール・クロソウスキーなど、フランス現代哲学に大きな影響を与えた人物たちが参加していた。彼は、「主人と奴隷の弁証法」を基軸としてヘーゲル哲学の体系を再解釈したことが有名であり、これは後世の思想家たちに思想に大きな影響を与えている。そこで本研究会では、コジェーヴの『ヘーゲル読解入門』を講読した後、バタイユ、レヴィナスらの思想の中でコジェーヴのヘーゲル解釈がどのような影響を及ぼしているのかについて詳細に検討してゆく。

	目標とする成果 　コジェーヴが使用する「享受」、「欲望」、「歴史」といった語彙は、彼による独自の性格を内包したまま、後世の思想家たちによって発展させられてきた。本研究会では、以上のことを念頭においた上でコジェーヴの読解を進めてゆくことで、フランスにおけるヘーゲル受容にとどまらず、現代思想の複雑な文脈を正確に理解するための基盤を用意することを目標とする。同時にこの読解は、現代思想の基盤そのものを問い直す意味を持つと言える。
メンバー構成	文学研究科　後期課程：1 名、前期課程：1 名 先端総合学術研究科：1 名 法学部：1 名 他大学：1 名

（五十音順一覧に戻る）

No.10

研究会名	日本思想史研究会
研究会の目的、問題意識や解明すべき課題、目標とする研究成果	○研究会の目的 　日本思想史研究会は、立命館大学の大学院生を中心に、広く地域・時代を問わず歴史・思想史を研究する会である。単に「日本の思想」を研究するのではなく、日本で／日本から歴史・思想史を研究すること、また思想史を越えて、文学・哲学・政治学・社会学など人文・社会科学の全般的な知識の習得を目指す。 ○問題意識や解明すべき課題 　前年度は、「丸山政治思想史学への批判からみる「知識人」「民衆」の連結性ー『日本政治思想史研究』を中心に」というテーマを設定した。このテーマの下、さまざまな時代、思想家を専門とする院生や研究者が、自身の専門性に照らして日本思想史研究の名著『日本政治思想史研究』を輪読した意義は大きい。とりわけ、西田幾多郎や吉本隆明を専門とする哲学・倫理学研究者たちからは、丸山が依拠したヘーゲルなどの哲学者のみならず、ロバート・ブランダムのような現代の哲学者の議論なども援用しながら議論を行ったことで、丸山思想史学における「知識人」の側面をより深く理解することができた。他方、柳田國男や神島二郎、吉本隆明らを専門とする思想史研究者たちからは、丸山の神道・国学理解や近代理解について、安丸良夫の民衆思想史研究や「通俗道徳」論などと比較するような問題提起や議論が投げかけられたことは、丸山の著作における「民衆」的な側面を議論する素地となった。換言すれば前年度の『日本政治思想史研究』の読解を通じ、「知識人」と「民衆」について、ひいては「近代的なるもの」と「近代性に還元し得ないもの」との不可分な関係について議論することができた。この点は研究会員共通の財産になったと思われる。秋学期の様々な個人研究が―その分析対象の多様性にも関わらず―啓蒙主義的な側面を超えて、近代の概念を複眼的に捉えなおそうとするという点で共通していたことは、偶然ではない。 　こうした前年度の成果を踏まえると、二つの問題設定がありうる。一方は「近代的なるもの」の議論を深めること、他方は「近代性に還元し得ないもの」とは何かをめぐる研究

	である。丸山は 1960 年台から 70 年代にかけて、日本思想の底流への探究、いわゆる「原型」論や「古層」論と呼ばれるものへの研究に向かう。同時期に加藤周一が『日本文学史序説』を、吉本隆明が 1980 年代中後半に『柳田國男論』としてまとめられる一連の論考を著したことも、こうした思想史学的な潮流に位置付けられよう。彼らは西洋という他者に目を向けていながら一否その眼差しゆえに一日本の土着性に鋭い眼差しを向け得た。丸山をはじめとした戦後知識人の思想を学ぶ上で、このような土着性をめぐる議論を等閑視することはできない。確かに土着性を巡る議論は日本特殊論や文化決定論に堕す危惧がないではないが、本研究会が持つ国際性・学際性に鑑みると、多角的な議論によってそのような危険性は最小化されよう。また戦後知識人たちが対象化した日本の「土着的なるもの」は、少なくとも日本思想史研究においては普遍的な問題設定である。したがって本年度の研究は前年度同様、研究会全体のレガシーとなるポテンシャルを持つであろう。 〇目標とする研究成果 　参加者各自が、今一度自身の問題関心の下で、日本思想における「土着的なるもの」について関連著作を輪読し、得られた知見をそれぞれの研究に活かし、論文や発表などの成果に繋げていくことを目標とする。
メンバー構成	文学研究科　後期課程：4 名 社会学研究科　後期課程：1 名

（五十音順一覧に戻る）

No.11

研究会名	Public & Inclusion Research Project
研究会の目的、問題意識や解明すべき課題、目標とする研究成果	【目的】 　公共圏と社会的排除/包摂をテーマに輪読会・研究会を通じて各自の研究力を向上させる。 【問題意識】 　COVID-19 の感染拡大が著しくなって以降、差別や貧困などの社会問題が浮き彫りとなった。自己責任論と社会的排除が横行し、公共圏は驚くべき速度で縮小している。これらに対して、院生間で共同的に進めたい。 【目標】 ①アフターコロナの学修における学び方を模索し、ピア学習のモデルを提示する。 ②研究会によって得られた知見を学会報告や論文投稿を通じて発信し、学術研究の発展に寄与する。
メンバー構成	先端総合学術研究科：4 名 社会学研究科　前期課程：2 名 産業社会学部：2 名 他大学：5 名

（五十音順一覧に戻る）

No.12

研究会名	マインドフルネス研究会
研究会の目的、問題意識や解明すべき課題、目標とする研究成果	マインドフルネス研究会(Seminars of Mindfulness; SOM)は、2020 年から成立し、メンバーのマインドフルネスと統計学のスキルの向上、国際かつ学際的交流のプラットフォームを提供することに努力しています。今年では、マインドフルネス、感情、親密関係の関係性についての研究を行っています。皆さまのご参加をお待ちしております。
メンバー構成	人間科学研究科　後期課程:5 名 テクノロジーマネジメント研究科　後期課程:1 名

(五十音順一覧に戻る)

No.13

研究会名	明律研究会
研究会の目的、問題意識や解明すべき課題、目標とする研究成果	本研究会は、『明律(みんりつ)』(中国の明(みん)の時代の基本法典)に書かれている法律条文の内容と、その法律がどのように運用されていたかを分析することで、前近代の中国社会のあり様を明らかにすることを目指しています。また、『明律』に影響を受けた徳川時代の日本の法律との比較分析などもしています。最近は、明中期の『皇明條法事類纂』という「条例」(判例や施行例)を集めた史料を読んで訳註を作って成果にしています。
メンバー構成	文学研究科　後期課程:4 名、前期課程:1 名 文学部:1 名

(五十音順一覧に戻る)

No.14

研究会名	立命館司法犯罪心理の会
研究会の目的、問題意識や解明すべき課題、目標とする研究成果	【研究会の目的】 本申請研究会では、心理学を専攻する学生の中でも法学・犯罪学分野の研究を行う学生同士が、積極的に研究を社会に発信していけるような環境づくり、を目的としている。また、大学院生のみならず、学部生に向けて司法・犯罪心理学をより身近に感じられるような環境づくりや自身の今後の研究のきっかけとなる場の提供、も目的としている。具体的には、⑴心理学を軸にした法学・犯罪学研究のための円滑な研究活動の場の提供、⑵学部・学年や研究科を越えた学生同士の交流、⑶研究成果の学内・学外発信のためのスキル向上、の 3 つを目標とする。 【問題意識や解明すべき課題】 昨年、秋期より発足され活動を行なってきた本申請研究会であるが当初は、学生に法学・犯罪学・心理学の分野をより身近に感じられるような環境づくりや自身の今後の研究のきっかけとなる場の提供、を目的としていた。また具体的な目標の中には、学部・学年や研究科を越えた学生同士の交流が含まれていた。しかし、半年間活動してきて法学を専攻とする学生の入会がなかったことが一番の問題として挙げられる。その

	ため、開催した勉強会でも法学的知識について初学者が多く、内容を理解することが難しいことが多々あった。さらに本学にある人間科学研究所に関わる司法関連の学術・研究機関「えん罪救済センター」や総合心理学部/人間科学研究科の「司法面接支援室」での活動も行うことができなかった。よって、今年度はより積極的に本申請研究会の宣伝活動を行い、参加メンバーと本学の研究機関と共同した研究活動を実施する必要がある。 【目標とする研究成果】 　よって本申請研究会では、心理学を専攻する大学生・大学院生が中心となって司法・犯罪心理学に関する研究活動が主な研究成果として期待できる。例えば、週 1 回の定期ミーティング、読書会(論文読み)や講師を招いた勉強会の開催、関西圏内にある少年院・鑑別所・刑務所等への施設見学、司法・犯罪心理学に関連する研究者や児童相談所職員・警察官・弁護士等の実務者との学術研究や研究活動、学部生・院生を対象とした勉強会、などである。これらの継続的な活動による成果は、学内・学外で発表する。
メンバー構成	人間科学研究科　後期課程:2 名、前期課程:5 名 法務研究科:1 名 総合心理学部:2 名

(五十音順一覧に戻る)

No.15

研究会名	立命館朝鮮近現代史研究会
研究会の目的、問題意識や解明すべき課題、目標とする研究成果	本研究会は、朝鮮近・現代史における諸問題をめぐって、研究発信、研究者同士の交流、共同研究、対外的な研究交流などを目的とする。例えば、徴用工訴訟問題、植民地朝鮮における朝鮮人の満洲移民問題、韓国内における親日派の問題、「朝鮮王公族」の成立過程にみる韓国統治の多面性などをめぐって、朝鮮近現代史に関する視野と幅を広げて、研究の深化を目指している。
メンバー構成	文学研究科　後期課程:2 名、前期課程:4 名 研究生:1 名

(五十音順一覧に戻る)

No.16

研究会名	文構造研究会
研究会の目的、問題意識や解明すべき課題、目標とする研究成果	私達の研究会では、先行研究を通して日本語の文構造について学び、その体系を理解することを目指します。また、この研究会で学んだ理論を実践につなげることも重視しており、具体的には、外国ルーツ高校生の日本語学習支援への役立てを目標としています。
メンバー構成	言語教育情報研究科　修士課程:2 名 文学研究科　前期課程:1 名

(五十音順一覧に戻る)